第80回 憲法を考える映画の会

ガザからの報告

第一部　ある家族の25年
第二部　民衆とハマス

手元資料

●日時：2025年 3月20日（休・木）
　　13時30分～18時00分
●会場：文京区民センター ３A会議室
　　（地下鉄 春日駅 2分・後楽園駅 5分）

■プログラム
13：30～13：40　この映画について
13：40～15：40 『ガザからの報告』
第一部　ある家族の25年 上映 (120分）
15：50～17：15
第二部　民衆とハマス 上映　(85分）
17：20～18：00　トークシェア
（土井敏邦監督のお話＆質疑など）

■手元資料 目次

資料❶　『ガザからの報告』について　P.2
資料❷　『ガザからの報告』の感想　P.3
資料❸　「パレスチナ・ガザ」関連年表　P.4～5
資料❹　「パレスチナ・ガザ」関連映像作品　P.6～8
資料❺　第79回憲法を考える映画の会　報告　P.9～10
資料❻　憲法映画祭2025のご案内　P.11
憲法を考える映画の会 あとおいニュース　第49号 2025年3月20日　P.12

S

資料❶　『ガザからの報告』について

【内容紹介】

【作品の解説】『ガザからの報告』の報告』

第1部「ある家族の25年」（120分）
　故郷を追われ、ガザ最大の難民キャンプ「ジャバリア」で暮らすエルアクラ家。
　職につけず、結婚もままならない息子たち。家族と共に故郷へ戻れる日を待ち続けている父。イスラエル軍の撤退、解放、パレスチナ自治政府の誕生――。「和平」ムードに人々が歓喜する一方で、父は「これは本当の和平ではない」と怒り、故郷への帰還を諦めて家の増築を始める。
　パレスチナ初の選挙が行われ、インフラが整備されたガザで、エルアクラ家の息子たちは仕事と家庭を持ち、新たな生活を送っていた。しかし自治政府の独裁・強権政治と腐敗が深刻化し…。

第2部「民衆とハマス」（85分）
　イスラエル国家を認めず、全パレスチナの解放、難民の帰還を掲げるハマス。
　彼らは貧困に苦しむ家庭への食料配布や孤児の救済、女性の職業訓練、医療支援といった慈善事業と、 パレスチナ解放をめざす武装闘争の両面で民衆の支持を拡げてきた。2006年の選挙と、翌年の内戦の勝利によってハマスがガザ地区を実効支配するようになると、イスラエルは封鎖政策を強化。さらにはハマスの悪政も重なり、人びとはかつてない貧困に喘ぐことになる。
　そして今回のガザ攻撃を受けた現地からの報告をもとに、インフラも人間も、すべてが破壊されてしまった現在のガザの厳しい現状を伝える。
2024年制作/110分/土井敏邦監督作品/ドキュメンタリー映画
（映画『ガザからの報告』公式ホームページより）

【なぜ今、『ガザからの報告』なのか――土井敏邦】

　遠い国の人たちに起こっていることを伝えるとき、まず伝え手がやるべきことは、現地の人々が私たちと同じ人間であることを視聴者、読者に伝えることだと私は考えている。

　現在ガザで起こっている事態も、ニュースが伝える「死者4万人、負傷者約8万人」という数字に、私たちは現場の実態を「分かった」つもりになる。しかし一人ひとりが私たちと“同じ人間”であることを思い当たったとき、あの空爆や砲撃で死傷した子どもたちの姿に「もし、あの子が自分たちの息子だったら、孫だったら」と想像できる。その時、「死者4万人」という数字は、私たちと同じ人間の一人ひとりの“死の痛み” “悲しみ”の4万倍なのだ、と言う認識に変わるかもしれない。そういう伝え方をすることで、遠いガザで起こっている事態を、日本にで暮らす私たちに“引き寄せる”ことができるのではないか。
　私がやるべきことは、そのための“素材”を提供することではないか。そのためには、『等身大・固有名詞の人間の姿・日常生活』を、きちんと描かなければならない。それに最も有効な方法が『住み込み取材』だった。
（映画パンフレット「なぜ今、『ガザからの報告』なのか」より）

資料❷　『ガザからの報告』の感想

　どちらかと言えば、パレスチナ問題、ガザの問題について考えることを、自分は避けてきたように思います。悲惨なジェノサイドが続いていることは報道等でも伝えられているし、罪もないガザの人々が圧倒的なイスラエル軍の攻撃に遭って死んでいくのを放っていていいものかとは思います。そして、どちらかと言えば、長年イスラエルによって隔離遮断され、日常的に生活を壊され続けているパレスチナ人側に味方する気持でいました。
　それ以上思考を止めていた自分は、この映画を見て始めて知ったことがあり、気付きました。

【作品の解説】
第1部「ある家族の25年」
　故郷を追われ、ガザ最大の難民キャンプ「ジャバリア」で暮らすエルアクラ家。
　土井敏邦は1993年9月の「オスロ合意」直後から住み込みで取材を開始した。
　職につけず、結婚もままならない息子たち。家族と共に故郷へ戻れる日を待ち続けている父。イスラエル軍の撤退、解放、パレスチナ自治政府の誕生――。「和平」ムードに人々が歓喜する一方で、父は「これは本当の和平ではない」と怒り、故郷への帰還を諦めて家の増築を始める。
　パレスチナ初の選挙が行われ、インフラが整備されたガザで、エルアクラ家の息子たちは仕事と家庭を持ち、新たな生活を送っていた。しかし自治政府の独裁・強権政治と腐敗が深刻化し…。
　25年の歳月をかけエクアクラ家の人々の人生をみつめた本作はガザ住民にとって「オスロ合意」とは何だったのかを問い、「ガザのパレスチナ人」と一括りにされる彼らが私たちと“同じ人間”であることを伝える。なお、エルアクラ家の人々は今回のイスラエルの軍事作戦により、消息が途絶え安否不明となっている。
第2部「民衆とハマス」
　イスラエル国家を認めず、全パレスチナの解放、難民の帰還を掲げるハマス。
　彼らは貧困に苦しむ家庭への食料配布や孤児の救済、女性の職業訓練、医療支援といった慈善事業と、 パレスチナ解放をめざす武装闘争の両面で民衆の支持を拡げてきた。2006年の選挙と、翌年の内戦の勝利によってハマスがガザ地区を実効支配するようになると、イスラエルは封鎖政策を強化。さらにはハマスの悪政も重なり、人びとはかつてない貧困に喘ぐことになる。
　絶望した住民たちの中にはイスラム教で禁止されている自殺に走る者、ガザ脱出を図る者まで続出していた。本作は後にイスラエルに暗殺されたハマスの指導者やスタッフ、戦闘員、そしてガザ住民へのインタビューを重ね、ハマスが民衆から乖離していったプロセスを追い、今のガザの惨状の根源を浮かび上がらせる。
　そして今回のガザ攻撃を受けた現地からの報告を元に、インフラも人間も、すべてが破壊されてしまった現在のガザの厳しい現状を伝える。（映画『ガザからの報告』公式ホームページより）

　どちらかと言えば、あまりにも悲惨な映像が延々と続くと思っていたので、第一部「ある家族の25年」を見た後、パレスチナ問題のことが分かったと言うより、パレスチナの人々の抱いている気持ちのようなものに近づいた気がしました。
　映画の後のトークでも監督の土井敏邦さんは、「パレスチナ問題を知識としてとらえるのでなく、どの戦争でも苦しむのは民衆なのだと言うことを知ってほしい」と話されていました。確かにそうだ、と私は目からウロコが取れたようにガザを、イスラエルを見る事が出来ました。

　土井監督のこの映画の制作意図にも共感しました。つまり、「遠い国の人たちにお起こっていることを伝えるとき、まず伝え手がやるべきことは、現地の人々が私たちと同じ人間であることを視聴者、読者に伝えること」「もしあの子が自分たちの息子だったら、孫だったらと想像でしたら、「死者4万人」という数字は、私たちと同じ人間の一人ひとりの“死の痛み”“悲しみ”の4万倍なのだと認識できる」と話していました。「そういう伝え方をすることで、遠いガザで起こっている事態を日本にで暮らす私たちに“引き寄せる”ことができるのではないか。」私がやるべきことはそのための“素材”を提供することではないかと土井さんは話します。「そのためには、「等身大・固有名詞の人間の姿・日常生活」をきちんと描かなければならない。

　会場からの発言にこのようなものがありました。「ハマスの2023年10月７日の攻勢は真珠湾攻撃を行った日本軍と同じ暴挙、ハマスは自分たちが越境高世を行ったらイスラエルに打撃を与えることは想像出来ても、パレスチナ（ガザ）の民衆がどうなるかは頭になかったに違いない。彼らは自分たちのことを守ろうと司か考えていないのではないか。権力者とはそういうものだろう。
　メディアもまた、被災した住民個々人の真情を吐露する声はほとんど伝えられていない。
　多くのメディアが現在のガザの情況を「イスラエル対ハマス」「イスラエル対パレスチナ」と二項対立で描く中、ガザの今の状況を伝えてきたMは「ガザパレスチナは決して一枚岩ではないこと」「家族も生活も住処も将来の希望さえも奪われた民衆の中にはそのきっかけを作ったハマスに激しい怒りを抱いている住民が少なく無いこと」を伝えてきている。
　この映画はまた、第一部、「ある家族の25年」の中で、ガザへの直接による攻撃の酷さ、悲惨さだけで無く、いｋいていけない若者たちの苦しみを描いている。攻撃は、人が生きる基盤を奪っていく。
　戦争で苦しむのは、権力者ではなく、常に民衆である。だから戦争について、どちらが正しいとか、買った方が正しいとかそんなことは一切無い。負けるのは、被害を受けるのは、どちらも民衆である。戦争自体が負けなのだと言う結論。

　ジャーナリストの立ち位置、あり方というものもこの映画は明らかにしている、考えさせる。
　「ある家族の25年」は、ガザだけでなく、ガザのことを考えてきた、自分の25年をも写しだして、自分を見つめることになった。それがドキュメンタリーというものなのかも知れない。

【スタッフ】
監督・製作・撮影・編集:土井敏邦
整音：川久保直貴
デザイン：野田雅也　尾尻弘一

2024年制作／205分／日本映画／ドキュメンタリー
配給協力：リガード

公式ホームページ：
予告編：
上映情報（自主上映問合せ）

資料❸「パレスチナ・ガザ」関連年表（１）

【パレスチナ紛争前史】

1897年　第1回シオニスト会議（→シオニズム）
ユダヤ人のパレスチナ入植が進む。
1914年　第一次世界大戦
パレスチナを支配するオスマン帝国と英仏による戦闘で、パレスチナを含む東アラブ地方が主要な戦場に。イギリスはアラブ、ユダヤ勢力と帝国打倒で共闘する。
1915年　フセイン・マクマホン協定
エジプト駐在イギリス高等弁務官マクマホンが、メッカのシャリーフであるアラブ指導者・フセインに対して、オスマン帝国打倒に協力すれば東アラブ地方にアラブの独立国をつくると約束。約束は、一時棚上げになるが、第二次世界大戦前後までに実行され、現在のアラブ諸国が成立。
1916年　サイクス・ピコ協定
英仏露によって東アラブ地方を分割統治する取り決め。パレスチナをイギリスが統治することに。
1917年　バルフォア宣言
イギリスの外相バルフォアが、ユダヤ人がパレスチナに民族的郷土を建設することに同意した宣言。
1939年　第二次世界大戦
ナチス・ドイツに迫害された大量のユダヤ人がパレスチナへ。
1947年　国連パレスチナ分割決議（決議181）
国連総会で、イギリスによるパレスチナ統治地域を、ユダヤとアラブの2国に分割する決議が採択された。アラブ側が拒否。ユダヤ側は、独立戦争後に拒否。ただ同決議の考え方は、紛争の2国家解決構想として、現在も残る。

【イスラエル建国と中東戦争】

1948年　イスラエル建国、第一次中東戦争

〈西岸・ガザ地区 〉
オスマン帝国崩壊後、1922年からイギリスがパレスチナを委任統治した。イギリスは、ヨルダン川東岸をヨルダン王国とした。残りの地域では、ユダヤ勢力とアラブ人（パレスチナ人）が国家創設を主張した。イギリスは、誰に主権を移譲するか決められず、委任統治を放棄し、1948年5月に撤退した。イギリスの統治責任放棄が、その後の紛争を複雑化させた。国連は、パレスチナ分割を決議（決議181）したが、アラブ側が拒否し、イギリス軍撤退後、イスラエルが独立を宣言し、第1次中東戦争（48～49年）になった。この時イスラエル軍が占領した地域が、現在のイスラエル領である。ガザはエジプト軍が、西岸はヨルダン軍が占領した。エジプトはガザを併合せず、ガザの主権は未定状態になり、住民は無国籍になった。ヨルダンは西岸を併合しようとしたが国際的な認知を得られなかった。しかし西岸ではヨルダンの実効支配があり、住民はヨルダン国籍が付与された。ヨルダンは、1988年に至って西岸への法的権利を破棄した。

〈パレスチナ難民〉
48年5月の第一次中東戦争によって土地を追われたパレスチナ難民は約70万人。50年に施行された不在者財産没収法により、47～48年9月までの間にパレスチナの居住地を離れたパレスチナ人の土地、家屋などの財産は没収され、イスラエルの国有地・財産となった。イスラエル国土の9割強が国有地であるが、大半は、この時没収された土地と推定される。難民らは、国も国籍もない状態で離散生活を強いられた。

1956年　第二次中東戦争
スエズ運河の国有化をめぐって、エジプトと英・仏・イスラエルが戦争。
1964年　パレスチナ解放機構（PLO）誕生
1967年　第三次中東戦争
イスラエル軍が大勝して西岸とガザ地区を占領し軍政を開始（ガザ占領は2005年まで）。

〈国連安保理決議242〉
中東和平交渉の基礎となる唯一の国連安全保障理事会決議。1967年の第三次中東戦争（67年戦争）の際、安保理は決議242を採択した。同決議は、イスラエル軍に67年戦争で占領した地域（ゴラン高原、西岸・ガザ、シナイ半島）からの撤退を求め、同時に、地域にあるすべての国の存続を認めた。同決議は、イスラエルの存在を認める決議であり、「領土と和平の交換」を原則としている。決議242は、イスラエルと隣接する国・組織（レバノン、シリア、ヨルダン、エジプト、パレスチナ）がイスラエルと交渉をする際の基礎となっている。73年の第4次中東戦争の際、安保理が決議した安保理決議338の内容は決議242の履行を求めるもの。

1970年　ヨルダン内戦
ヨルダン政府がPLOを国外へ追放、PLOはレバノンへ拠点を移す。
1973年　第四次中東戦争
エジプト軍とシリア軍が実施したイスラエルへの奇襲作戦。ユダヤ教の祭日に実施されたため「ヨム・キプール戦争」とも称される。イスラエルは、アラブ諸国の動きを誤認したため、情報分析の失敗例として有名。同戦争の際、石油危機に。なお戦いは、引き分けで終了。
1979年　イスラエルとエジプトが国交樹立
イスラエルとアラブ諸国間の最初の国交樹立・和平条約。イスラエルは1982年にシナイ半島をエジプトに返還。エジプトとの和平は、イスラエルの安全保障の基盤。
1981年　イスラエルがゴラン高原併合
第三次中東戦争で占領した地域で、戦後、イスラエルが併合したのは東エルサレムと同高原だけ。国際的には承認されていない。
1982年　レバノン戦争
イスラエルがレバノンの首都ベイルートを包囲、PLOは国外に退去し、中東各地へ。同戦争後、闘争の中心はイスラエル占領下の西岸とガザに移行。
1987年　第一次インティファーダ

〈第一次インティファーダ〉
1987年12月初旬、ガザの入り口で起きた交通事故を契機に発生した。当初は無統制の住民暴動だったが、88年春ごろには統一され、目標を持つ政治運動になった。メディアは、暴動・住民蜂起という言葉からインティファーダ（揺らす）というアラビア語表記をそのまま使用するようになった。イスラエル軍は、数百万人が行う反占領運動を抑制できず、武器を使わず投石する若者を兵士が銃撃する事態に追い込まれた。イスラエルの占領政策は、国際社会とイスラエル国内からの厳しい非難に直面した。力による鎮圧ができないイスラエルは、政治的な解決を模索した。第一次インティファーダは、パレスチナ人の政治的威信を国際的に高めた。

1988年　PLOが西岸とガザ地区にパレスチナ国家建設宣言
ハマス台頭
PLOは、イスラエル全土の解放という実現不可能な目標をあきらめ、より現実的な政策である西岸・ガザにパレスチナ国家を建設する戦略に転換した。イスラエルは、当初、同宣言を無視したが、この戦略転換により、その後両者の政治交渉が可能になった。ハマスは、同宣言に反対した。

オスロ合意とそれ以後
1993年　イスラエルとPLOが相互承認（オスロ合意）

資料❸「パレスチナ・ガザ」関連年表（２）

〈相互承認〉
イスラエルとPLOが、お互いに敵であり、従って、交渉相手であると公式に認めた1993年の歴史的合意。同承認の前と後では、両者の関係は劇的に変化した。イスラエルとPLOは、長年相手の存在を認めていなかった。そのためパレスチナ紛争は「当事者なき紛争」と称された。しかし、87年末から西岸とガザで発生したインティファーダが鎮圧できないイスラエルは、政治交渉によって収拾を図るしか選択肢はなかった。88年秋、PLOは「パレスチナ独立宣言」を採択し、事実上イスラエルの存在を承認した。イスラエルとPLOは、93年初頭からオスロで秘密交渉を開始し、夏までに合意に達した。秘密交渉での合意を公式な合意とするためには、イスラエルとPLOの関係を公式化する必要があった。93年9月9日、ノルウェーのホルスト外相は、PLOのアラファト議長の書簡をイスラエルのラビン首相（いずれも当時）に運び、ラビン首相の手紙をアラファト議長に運んだ。同書簡は、イスラエルの首相が、PLOの議長に初めて公式に送った、ただ一文からなる書簡だった。その一文で、ラビン首相は、PLOを交渉相手として承認した。相互承認の直後、アメリカはPLOに対する法的扱いを変えた。その結果、アラファト議長は、9月13日にアメリカを訪問し、ホワイトハウスでクリントン大統領（当時）と会談し、オスロ合意の調印式に参加することが可能となった。

1994年　イスラエルとヨルダンが国交樹立
西岸とガザ地区でパレスチナ暫定自治開始

〈パレスチナ暫定自治政府〉
パレスチナ国家樹立に向けて、西岸・ガザ地区で、外交や対外安全保障を除き、行政サービス・治安維持などを担当するため設置された機関。パレスチナ人の自治権は1993年9月、「暫定自治に関する諸原則」（オスロ合意）で確立した。その後、政治的権利が拡大、96年1月にパレスチナ立法評議会議員・首長（現在は「大統領」）を選出する総選挙が実施され、アラファトPLO議長が暫定自治政府大統領に就任した。自治政府は、立法権限は評議会（PLC　議席132）が有し、行政権限は大統領を長とする行政機関が有する。また司法は、イスラエル軍の法令が優先され、西岸ではヨルダンの法体系、ガザではエジプトの法体系が機能している。なお、憲法に相当するものとして、2003年3月に基本法を制定している。

995年 オスロ合意の当事者であるイスラエルのラビン首相が同国の過激主義者によって暗殺
2000年 第二次インティファーダ（～2005年）

第二次インティファーダ
2000年9月に当時のリクード党首、アリエル・シャロンが、東エルサレムの「神殿の丘」訪問を強行したことを契機に発生した。第一次と異なり、パレスチナの武装勢力が中心の武装闘争。加えて自爆テロが多用され、一時は準戦争状態になった。しかし、無統制の武力闘争に政治的目的も戦略もなく、一般住民の参加はほとんどなく、05年ごろに下火になった。国内での自爆テロに恐怖したイスラエル人は、パレスチナ人に対する不信感を強め和平達成への期待は消えた。バスやレストランへの自爆テロもあり、国際社会はパレスチナへの批判を強めた。同じインティファーダという言葉が使用されるが、第一次と第二次は、まったく異なる運動である。

2001年　パレスチナ強硬派のリクード党シャロンがイスラエル首相に就任
2002年　イスラエルがパレスチナの境界地域に分離フェンス建設
イスラエル国内での爆弾・自爆テロに手を焼いたイスラエルは、西岸とイスラエルの境界線に沿って壁の建設を開始した。

2003年　アメリカが中心となりパレスチナ国家樹立のロードマップ（行程表）を作成
2004年　PLOのアラファト議長死去、翌年アッバスが議長に就任
2005年　イスラエル軍と入植者がガザから撤退・退去
シャロン首相（当時）が決定したが、その意図について語る前に、病気で倒れたため分離の目的は明らかではない。西岸占領を維持するため、人口の多いガザを切り離したと推定される。イスラエル軍と入植者は、ガザから撤退・退去したが、イスラエル軍は、ガザ境界の陸・海・空の管理を継続。イスラエルは、ガザ占領は終了としているが、国際的には占領は継続と見なされている。
2006年　ハマスがパレスチナ評議会選挙で大勝
国際社会は、ハマスの政権に対して、(1)非暴力、(2)パレスチナとイスラエルの間で成立した過去の合意の承認、(3)イスラエルの認知、を求めたが、ハマスは、その要求に対して沈黙。その結果、ハマスは、政治的、外交的、経済的に孤立。
2007年　ハマスがガザを武力で掌握（→ガザの国境・境界問題）

ハマスによるガザ実効支配以後
2009年　イスラエルとハマスが戦闘（→ガザ紛争（2009年））
死者：パレスチナ約1300人／イスラエル13人
同2009年　イスラエルでネタニヤフ政権誕生（→イスラエルの宗教化・右翼化）
2012年　イスラエルとハマスが戦闘（→ガザ爆撃）
死者：パレスチナ156人／イスラエル6人
同2012年　国連がパレスチナを非加盟のオブザーバー国家として認める
2014年　イスラエルとハマスが戦闘　→ガザ戦争（2014年）
イスラエル軍が、ガザ内で地上戦を実施。死者：パレスチナ2100人／イスラエル72人
2020年　アブラハム合意
UAE（アラブ首長国連邦）、バーレーン、モロッコ、スーダンがイスラエルと国交樹立。トランプ大統領が成立に尽力。経済的利益を重視した合意。
2021年　イスラエルとハマスが戦闘
死者：パレスチナ232人／イスラエル12人
2023年　ハマスがガザ地区からイスラエル領内に侵攻、イスラエルはハマスに対して戦争を宣言
10月7日、ハマスはガザの分離壁を破り、ハマス戦闘員およびガザの若者ら約3000人がイスラエル領内に侵入した。イスラエル軍は、48時間後に、侵入したハマス戦闘員らの掃討作戦を終了したが、イスラエル市民・兵士ら約1200人が殺害され、240人近くが人質になり、イスラエル国民に大きな衝撃を与えた。ハマス側の死者は約1500人。イスラエル軍は、7日からガザへの攻撃を開始した。

2023年10月7日、ガザを実質統治するハマス戦闘員が、イスラエル領内に侵入し、市民・兵士約1200人を殺害した。衝撃を受けたイスラエルは、ハマスに戦争を宣言し、ガザ空爆を開始し、10月下旬にはガザ内での地上戦を開始した。イスラエル軍は、ハマスの排除を目的に掲げている。戦争が終結した後、イスラエルは、ガザとの関係を再構築する必要があるが、その将来の関係は、過去1世紀に及ぶパレスチナ紛争の歴史を踏まえたものでない限り、安定しないだろう。
イスラエルとパレスチナは、長年相手の存在を認めず「当事者なき紛争」と呼ばれた。この状態は、1990年代はじめに変化し、イスラエルとPLOは、お互いに相手を敵として承認し、その敵との交渉を通じて和平を模索する決断をした。しかし、パレスチナ側では、イスラエルの存在を認めず、イスラエル国家の破壊を目標に掲げる組織が残った。それがハマスである。ハマスは、イスラエルとの平和共存ではなく、長期にわたる武力闘争でイスラエルを壊滅させる考えである。

（【年表解説】パレスチナ紛争の歴史
イミダス編　監修：中島勇（中東調査会協力研究員）より転用させていただきました）

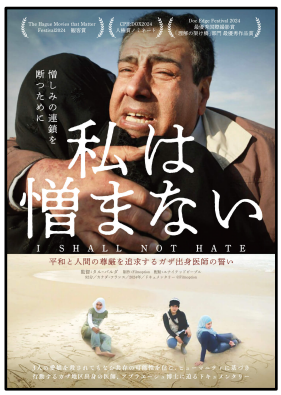
資料❹　「パレスチナ・ガザ」関連映像作品（１）

ノー・アザー・ランド 故郷は他にない

No Other Land
2024年製作・上映日：2025年02月21日
製作国：パレスチナ　ノルウェー
上映時間：95分／ドキュメンタリー
配給：トランスフォーマー
ヨルダン川西岸地区のマサーフェル・ヤッタで生まれ育ったパレスチナ人の青年バーセルは、イスラエル軍の占領が進み、村人たちの家々が壊されていく故郷の様子を幼い頃からカメラに記録し、世界に発信していた。
そんな彼のもとにイスラエル人ジャーナリスト、ユヴァルが訪れる。非人道的で暴力的な自国政府の行いに心を痛めていた彼は、バーセルの活動に協力しようと、危険を冒してこの村にやってきたのだった。同じ想いで行動を共にし、少しずつ互いの境遇や気持ちを語り合ううちに、同じ年齢である2人の間には思いがけず友情が芽生えていく。しかしその間にも、軍の破壊行為は過激さを増し、彼らがカメラに収める映像にも、徐々に痛ましい犠牲者の姿が増えていくのだった―。
監督：バーセル・アドラー　ユヴァル・アブラハー　ハムダーン・バラール　ラヘル・ショール

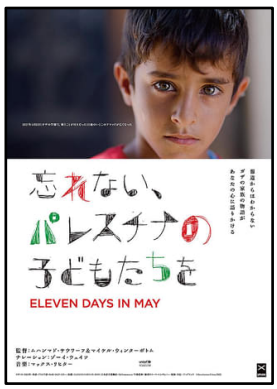
私は憎まない

I Shall Not Hate
2024年製作・上映日：2024年10月4月
上映時間：92分／ドキュメンタリー
製作国：カナダ　フランス
ジャンル：配給：ユナイテッドピープル
あらすじ
3人の愛娘を殺されながらも共存の可能性を信じ、平和と人間の尊厳を追求するガザ出身の医師イゼルディン・アブラエーシュ博士に迫ったドキュメンタリー。
ガザ地区の貧困地域出身で、パレスチナ人としてイスラエルの病院で働く初の医師となったアブラエーシュ博士。産婦人科でイスラエル人とパレスチナ人両方の赤ちゃんの誕生に携わる彼は、病院で命が平等なように外の世界でも同じく人々は平等であるべきだと、医療で分断に橋を架けようとしてきた。しかし2009年1月、自宅がイスラエル軍による砲撃を受け、3人の娘と姪が命を落としてしまう。
監督：タル・バルダ



忘れないパレスチナの子どもたち

Eleven Days in May
2022年製作・上映日：2024年10月4月
製作国：イギリス
上映時間：92分／ドキュメンタリー
配給：アップリンク
あらすじ
2021年5月、イスラエル軍がパレスチナのガザ地区に行った空爆により、11日間で少なくとも67人の子どもたちが命を落とした。イギリスでそのニュースを見たマイケル・ウィンターボトム監督は、若い犠牲者たちを追悼する映画を製作することを決意。パレスチナ人の映画監督モハメッド・サワフと協力し、攻撃からわずか1カ月後に撮影を開始した。
アーカイブ映像や残された家族たちの証言を通して、世界中の子どもたちと同じようにそれぞれの希望や夢、野心を持って生きていたパレスチナの子どもたちの物語を映し出す。



愛国の告白　沈黙を破る・*Part* 2

2022年製作・上映日：2022年11月19日
製作国：日本
上映時間：170分／ドキュメンタリー
配給：きろくびと
パレスチナで占領軍の兵士となったイスラエルの若者たちは、パレスチナ人に対して絶大な権力を行使する中で道徳心や倫理観を麻痺させていき、これに危機感を抱いた一部の元兵士たちが、占領軍を告発するNGO「沈黙を破る」を発足。土井監督が2009年に発表した長編デビュー作「沈黙を破る」では、彼らの活動と占領地の実態を捉えた。その後イスラエルでは右傾化がさらに進み、「沈黙を破る」の活動はイスラエル社会でさらに重要な存在意義を持つようになる。しかしその一方で、政府や右派勢力からの攻撃も強まっていく。
監督：土井敏邦

ファルハ

2021年製作
製作国：ヨルダン、スウェーデン、サウジアラビア
上映時間：92分／ドキュメンタリー
あらすじ
隠れた食糧庫の扉の隙間から覗く地獄…。
実話を基にした、緊迫の戦争女性映画。
1948年のパレスチナ。小さな村に住む14歳のファルハは、周囲からの女子に対する結婚圧力をはね除けて、都市での教育を受けることを望んでいた。しかし、国内の情勢は悪化の一途をたどり、村にも危険が迫ってくる。
監督：ダリン・J・サラム

傍観者あるいは偶然のテロリスト

2020年製作・**上映日：**2020年6月13日
製作国：日本
上映時間：119分／ドキュメンタリー
配給：シネマハウス大塚
あらすじ：
2018年にオープンした「シネマハウス大塚」の設立メンバーで館長の後藤和夫が、自身の経験をもとに製作した長編作品。上映会やイベント開催に利用できる多目的ホール「シネマハウス大塚」の開館に携わった後藤は、それ以前にはテレビ業界でドキュメンタリー番組や報道番組「ザ・スクープ」の演出などに従事し、紛争地帯を取材し、04～11年には「報道ステーション」のプロデューサーも務めてきた。映画館を作ったら次は映画を作りたいと考えた後藤は、パレスチナを舞台に偶然にもテロリストになってしまった男の物語を構想する。そのシナリオのリアリティを検証するため後藤は、ロケハンを兼ねてかつて取材したパレスチナを再訪する。映画は、20年前に後藤が駆け回った紛争地帯の生々しい記憶と、現在のパレスチナ各地を歩く後藤の姿が交錯し、世界の紛争の根源地といわれるパレスチナの現状を通して、世界は傍観者のままでいいのかを問いかけていく。
監督：後藤和夫

資料❹「パレスチナ・ガザ」関連映像作品（２）

ガザ　素顔の日常

2019年製作・上映日：2022年7月2日
製作国：アイルランド　カナダ　ドイツ
上映時間：92分／ドキュメンタリー
配給：ユナイテッドピープル
あらすじ：パレスチナ、ガザ地区の知られざる日常を捉えたドキュメンタリー。一般的に戦争のイメージが強いガザ地区だが、穏やかな地中海に面する同地区の気候は温暖で、花やイチゴの名産地でもある。美しいビーチには老若男女が訪れ、若者たちはサーフィンに興じる。その一方で、東京23区の6割ほどの広さしかない場所に約200万人のパレスチナ人が暮らしており、その多くが貧困にあえいでいる。イスラエルはガザ地区を壁で囲むだけではなく、2007年以降は物資や人の移動も制限しており、同地区は「天井のない監獄」とも呼ばれる。現実逃避するためにチェロを演奏する19歳のカルマは、国際法や政治学を学ぶため海外留学したいと考えている。監督：ガリー・キーン、アンドリュー・マコーネル

パレスチナからフクシマへ

2018年製作
製作国:日本
上映時間：56分／ドキュメンタリー
あらすじ：パレスチナ・ガザ地区の人権活動家ラジ・スラーニは、イスラエル占領下で解放運動に献身し、５年間の投獄と拷問の日々を強いられた。その後もガザで人権擁護の活動を牽引し続けている。その活動は世界で高く評価され、先の「ライト・ライブリフット賞」など数々の国際平和賞を受賞した。そのスラーニ氏が2014年10月の来日時に、福島・飯舘村を訪問した。放射能汚染のために家と石材工場を失った村民、乳牛を失い失業した元酪農家を訪問し対話する中で、スラーニ氏はフクシマの現実と直面する。彼がパレスチナの現実と重ね合わせたのは、いずれも“責任の所在”が曖昧にされ、その責任者たちが処罰されない不条理なフクシマの現実だった。そんなスラーニ氏が飯舘村の被災住民に訴え伝えたのは、数十年の侵略と占領と破壊の中でパレスチナ人を支えてきた人間の“厳”と、“正義のための不屈の闘い”だった。
土井敏邦監督作品

ガザの美容室

Dégradé
2015年製作・上映日：2018年06月23日
製作国：パレスチナ　フランス　カタール
上映時間：85分／ドラマ
あらすじ
オシャレする。メイクをする。たわいないおしゃべりを、たわいない毎日を送る。それが、私たちの抵抗。 パレスチナ自治区、ガザ。クリスティンが経営する美容院は、女性客でにぎわっている。離婚調停中の主婦、ヒジャブを被った信心深い女性、結婚を控えた若い娘、出産間近の妊婦。皆それぞれ四方山話に興じ、午後の時間を過ごしていた。しかし通りの向こうで銃が発砲され、美容室は戦火の中に取り残される――。 極限状態の中、女性たちは平静を装うも、マニキュアを塗る手が震え、小さな美容室の中で諍いが始まる。すると1人の女性が言う。「私たちが争ったら、外の男たちと同じじゃない」　↗

↗――いつでも戦争をするのは男たちで、オシャレをする、メイクをする。たわいないおしゃべりを、たわいない毎日を送る。それこそが、彼女たちの抵抗なのだ。
監督・脚本
タルザン・ナサール　アラブ・ナサー

オマールの壁

Omar
2013年製作・上映日：2016年04月16日
製作国：パレスチナ
上映時間：97分
あらすじ
思慮深く真面目なパン職人のオマールは、監視塔からの銃弾を避けながら分離壁をよじのぼっては、壁の向こう側に住む恋人ナディアのもとに通っていた。長く占領状態が続くパレスチナでは、人権も自由もない。オマールはこんな毎日を変えようと仲間と共に立ち上がったが、イスラエル兵殺害容疑で捕えられてしまう。イスラエルの秘密警察より拷問を受け、一生囚われの身になるか仲間を裏切ってスパイになるかの選択を迫られるが…。
監督・脚本：ハニ・アブ・アサド

ガザに生きる

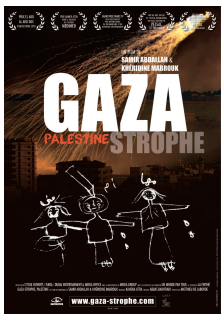
2012年製作
製作国:日本
上映時間：
配給：
あらすじ
イスラエルによる封鎖と砲爆撃で、ガザは瀕死の状況にある。1993年の「和平合意（オスロ合意）」で「中東の香港」を夢みた住民たちの希望は粉砕された。何がガザの現状を生みだしたのか――パレスチナを代表する人権活動家ラジ・スラーニの解説を通して、第1次インティファーダ（民衆蜂起）（1986年）からガザ攻撃（2008-9年）までのガザの歴史を映像でたどる。
第1部「ラジ・スラーニの道
第2部「2つのインティファーダ」
第3部「ハマスの台頭」
第4部「封鎖」
第5部「ガザ攻撃」

ぼくたちは見た ガザ・サムニ家の子どもたち

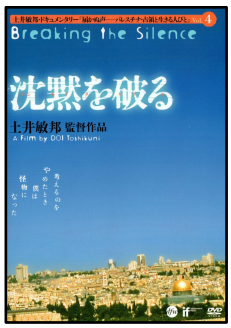
(2011年製作)
上映日：2011年8月6日
製作国：日本
上映時間：86分
ジャンル：ドキュメンタリー
配給：アジアプレス・インターナショナル
あらすじ：
2008年から09年のイスラエル軍によるパレスチナ・ガザ地区への大規模空爆と地上侵攻により、300人以上の子どもたちが犠牲となった。その事実に衝撃を受けたジャーナリストの古居みずえは、攻撃直後に現地入りし取材を始まる。封鎖されたガザ地区で、物資もなく食事がままならない日々を送りながらも、がれきの中で遊びながらたくましく生きる子どもたちの姿を通して、人間の「生きる力」に迫ったドキュメンタリー。
監督：古居みずえ

資料❹「パレスチナ・ガザ」関連映像作品（２）

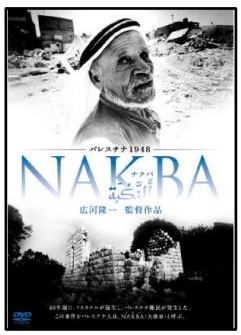
ガザ=ストロフ -パレスチナの吟
（2011年製作の映画）
Gaza-Strophe, Palestine
製作国：フランス　パレスチナ
上映時間：92分
ジャンル：ドキュメンタリー
配給：Shkran
あらすじ
2008 年 12 月末から 2009 年 1 月にかけてイスラエルによるガザの大規模侵攻が勃発。監督のサミール・アブダラとケリディン・マブルークは、停戦の翌日にパレスチナ人権センターの調査員と共にガザに入る。爆撃で両親兄弟を失った子ども、目の前で家族を銃撃された男性、土地を奪われ逃げてきた人々…「顔を持つ」一人一人の証言が記録されるとともに、パレスチナを代表する詩人、マフムード・ダルウィーシュの詩が引用され、ガザの人々が生きてきた歴史と記憶が呼び起こされる。監督：サミール・アブダラ　ケリディン・マブルーク

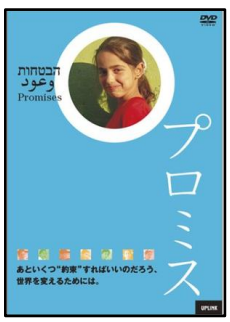


沈黙を破る
製作2009年・**上映日：**2009年5月2日
上映時間：130分
製作国：日本
ジャンル：ドキュメンタリー
配給：シグロ
あらすじ：
イスラエル軍によるヨルダン川西岸への侵攻作戦の中で起こった、難民キャンプへの侵攻を記録したドキュメンタリー。カメラは2 週間にも及ぶイスラエル軍の包囲、破壊、殺戮にさらされるパレスチナの人々の生活を追う。同じ頃、元イスラエル将兵の青年たちが“沈黙を破る”という名の写真展を開き、自らの加害行為を告白する。
監督：土井敏邦



自由と壁とヒップホップ
（2008年製作の映画）
SLINGSHOT HIP HOP
上映日：2013年12月14日
製作国：パレスチナ　アメリカ
上映時間：94分
ジャンル：ドキュメンタリー　音楽
あらすじ：
イスラエル領内のパレスチナ人地区で生まれた史上初のパレスチナ人ヒップホップ・グループ“DAM” 。彼らは言葉を紡ぐ。占領と貧困、差別により生きる意味を見いだせない若者たちのために。パレスチナ人としての誇りを失いかけている多くの人たちのために。服役中の親を持ち、行き場のない子どもたちの前で夢を語り、社会的な制限や抑圧の多い女性たちに楽曲を提供し、ラッパーとして背中を押す。
DAMの音楽は国境、年齢、性別といった壁を越える。そして、彼らに影響を受けたガザ地区や西岸地区の若者たちもまたヒップホップを志す。自身のおかれた苦難に立ち向かい、本来手にすべき自由を獲得するために。絶望的な状況をヒップホップのリズムに乗せ、歌うことは、これまで麻痺していた感情や思考を再び呼びさます。彼らの作り出す曲は、同じ境遇を生きる人々の大きな共感を呼び、熱狂を持って迎えられた。絶望から生まれた叫びが、多くの仲間たちの生きる希望に変わったのだ。
監督：ジャッキー・リーム・サッロー





ガーダ パレスチナの詩
Ghada Songs of Palestine
製作2005年・上映日：2006年5月20日
製作国：パレスチナ　アメリカ
上映時間：94分
配給：バイオタイド
あらすじ：
パレスチナ女性ガーダは、ガザ地区難民キャンプで生まれ育った。ガザ地区南部はイスラムの古い慣習の残っている地域だ。そんな中で、自立心の強いガーダは伝統的な結婚式を拒否しようとし、今までのやり方にこだわる母親や友人、婚約者の母親とぶつかっていく。
結局、ガーダは結婚式をあげず、花婿のナセルとエジプトに新婚旅行に出かける。1996年、ガーダは最初の子ガイダを出産し、女性として新しい生き方を貫いていく。しかし2000年、パレスチナでは第二次抵抗運動が始まる。親戚の男の子カラムの死を目にし、母親として気持ちを揺り動かされる。ガーダは、パレスチナ人としてのアイデンティティーに目覚める。
幼い頃、祖母から聞いた故郷の話や歌がガーダの心に蘇り、1948年に追われた話を、祖母年代の女性たちから聞き始める。100歳になるハリーマは人生の終末でイスラエル軍によって家を壊され、テント暮らしになる。ガーダはハリーマから土地に根付くパレスチナ人の心意気に魅せられる。
監督：古居みずえ

パレスチナ1948NAKBA（ナクバ）
製作2008年・上映日：2008年3月22日
製作国：日本
上映時間：131 分／ドキュメンタリー
ジャンル：配給：バイオタイド
あらすじ：世界各地の戦場を捉え続けるフォトジャーナリスト・広河隆一が、40年間に渡ってパレスチナを取材した膨大な量の記録を元に、現地の知られざる歴史と現実を明らかにしたドキュメンタリー。イスラエルが建国された1948年、70万人以上のパレスチナ人が故郷を追われて難民となった。廃墟と化した村の様子や、パレスチナ人、ユダヤ人の証言を通し、パレスチナ人が"NAKBA（大惨事）"と呼ぶこの事件の真相をあぶり出していく。
監督:広河隆一

プロミス
Promises
製作2001年**上映日：**2002年7月13日
製作国：アメリカ
上映時間：104 分／ドキュメンタリー
あらすじ：パレスチナ・イスラエルの国境を超えた子供達の交流を描くドキュメンタリー。ほんの20分と離れていない所に住んでいるのにお互いのことを全く知らないパレスチナとイスラエルの子どもたち。 敵対する社会に暮らしながら、彼らは互いへの興味を募らせます。監督B.Z.ゴールドバーグの提案により、彼等は一日だけ一緒に過ごす事になるのですが・・・。 7人の子供たちのありのままの日常を追いながら、「人はなぜ憎みあわなければならないか」を問いかけます。 1997～2000年の3年間、B. Z.ゴールドバーグの、パレスチナ自治区やエルサレム近郊への旅を追ったドキュメンタリー。監督：B. Z.ゴールドバーグ、ジャスティーン・シャピ、ロカルロス・ボラド

資料❺　第79回憲法を考える映画の会　報告（１）

第79回憲法を考える映画の会は、2025年1月12日、文京区民センターで行われました。
『映画○月○日、区長になる女』を見て、選挙で岸本聡子陣営の選挙対策委員長を務めた内田聖子さんのお話を聞いて、その感想を話し合いました。

第79回憲法を考える映画の会『映画 ○月○日区長になる女。』（2025/1/12） 参加票に寄せられたコメント

●いつも楽しく参加しています。
今回の映画で勇気をもらいました。(M.T.)

●黒猫同盟、いいですね。選挙の度にこの歌が聴けるといいなあ、と思います。
音が聞きにくい人のために字幕が欲しいなあと思いました。この映画に限らず（全ての）映画、動画に。
選挙は、その後が大事。本当にそうです。かつて青島幸男氏が都知事になりました。彼に投票した人々が支えなかったので彼は孤立してしまいました。例えば、彼の支援者が「いじ悪ばあさん」のかっこうで応援していたら、彼はどんなに心強かったことだろう、と思います。青島氏にはすまない事をしたと思っています。
映画の中で「女性区長」というのぼり旗が何度も出て来ました。東京都知事は女性です。彼女はおじさんたちと組んで、東京を壊しています（東京大改造）。再開発を悪とは言いませんが、住民を追い払ってツルツルピカピカの街（？）にしてしまうのには大きな違和感を覚えます。消防車が入れない地域を整備することは必要だと思います。
杉並区議会では（アホな）オジさん、ジイさんたちが政策とは関係の無い発言をしていやがらせをしているようですが、それはオジさんのひがみです。笑顔を忘れずに対応してください。
くれぐれもお身体大切に。
自転車で登庁、いいですねぇ!!（E.O.)

●見せたい映画　『憲法くん』『福田村事件』『国葬の日』『戦雲』…etc.
私は杉並区民ではありませんが、阿佐ヶ谷によく映画を観に行くので、駅周辺も訪れるのです。そこで「ひとり街宣」を見かけていたこともあり、興味があり、観ました。民主主義や社会正義というものは求め続けていかないといけないということが伝わってきました。岸本さんの選挙結果が、後に続くうねりになっていることを示すラストも感動しました。
―――――――――――――――――――――
映画は良かったのですが、前の席に２人並んだ女性が（おそらく）岸本さん支援者なんでしょうが、画面を観ながらやたらに“ああ、これ、これ、”そうそう“とか顔を寄せて話していてそのたびに画面が見えなくなり不愉快かつ迷惑でした。上映１時間ぐらい経ったところで注意しましたが、上映前に「映画中は私語や他人の迷惑になることをしないように、注意を一言言ったらいかがですか（フツウの映画館のように）自宅で友人と観ているような意識で不特定多数の人がいる場所でのマナーを教えた方がいいです。(S.W.)

身近なところから政治を考えさせられる映画でした。
初参加でしたが今後も関心をもってみてゆきます。(M.I.)

●このような機会を作って頂けることに感謝します。(T.I.)

●市民の意志や希望を実現するには、ねばり強く活動していくこと、また、あきらめないこと。選挙は手段であるけれど、大きなチャンスをつくるもの。選挙は続くよどこまでも…。という言葉が、深く耳に残りました。
世の中がどんどん不安になっていく今、住民、市民は、あきらめたり人任せにする時代は終わりにしないといけないと思いました。岸本区長も、これからがまた大変だと思いますが、これに続く地方自治を広げていかなければ、と心を新たにしました。(R.F.)

●集中して見入ってしまいました。
ドキュメンタリー…どんな風か期待してませんでしたがとても面白かったです。
杉並区の住民のパワー、見習いたいです。
文京区も変えたい!! (S.W.)

●映画の上映は字幕付でお願します。
トークの場合、手話通訳、リアルタイム字幕の用意をお願いしたい。(T.T.)

●私は前区ギ（日本共産党です）
大変よかった。(K.K.)
（前区議ご本人のようですが、このコメントは外しても可？）

●「葛根廟事件の証言」皆さんにこの事実知っていただきたいです。
今日は良い映画を観せて頂き、ありがとうございました。
また、こういった機会に世界が広がるのがうれしいです。(N.Y.)

●ありがとうございました。
ずっと観たかった映画、みられてよかったです。
トークも含めて、パワーをもらいました。(M.O.)

●大変良かったです。
民主主義がヤバイという現状、大変元気づけられました。
有難うございます。(H.N.)

●素晴しい映画＝ドキュメント作品でした。感動しました。
ヨーロッパ＝海外で活動されてきた人は、基本的に民主主義のベースの教育を受け、経験してきていることが大きい。
日本人はディベイトもできない。
だから「合意形成」をすることが日本はむずかしいのだと日頃思っています。(Y.I.)

●地方、国政問わず、（ほぼ）負け続けている身としてはうらやましい選挙戦でした。（昨年の都知事選は本当に残念でならない）元杉並区でした。今後の岸本区政がどう動いていくのか興味がわきました。
現練馬区です。練馬区でも石神井公園を分断する放射道路を抱えています。また練馬美術館の不透明な改築も気になるところです。練馬区からも岸本区長のような人がでてくれればいいと願っています。(K.N.)

●ありのままを映して、とても良かったです。難かしさもよくわかり、迫力のある映画でした。見ることが出来て、本当に良かった。
内田さんのお話しもわかりやすく、とても参考になります。もっともっとお話しを聞きたかったです。
内田さん、岸本さん、これからますます頑張って欲しいです。
若い二人に大いに期待しています！
応援しています！(T.M.)

資料❺　第79回憲法を考える映画の会　報告（２）

●杉並区長誕生おめでとうございます。
千代田区の100年超の木の伐採がつぎつぎとされています。なかなか報道されないのが原因だと思われます。都民の力でとめたいです。(F.O.)

●杉並の皆さんが民主主義をあきらめていないところに勇気をもらいました。
対して、文京区民は他人まかせ・区政任せの気風が根強く、この映画から得たものをどのように地元で活かせるだろうか、と望みを気楽には持てない気持ちでいます。
とはいえ、一人一人があきらめたら進まないので、頑張ろうと思います！(E.F.)

●選挙結果を知らないで観たのでスリリングでした。道路拡張と立退反対という1つの制作の当否を問う選挙であったので、真に住民の民意が問われる選挙であったと思う。187票差というのは本当に結果がどっちにころんでもおかしくないもので、神が味方したとでもいうほかないかも…投票率アップもあり、今回の運動の努力のたまもの。希望の見える、よい映画でした。(S.S.)

●杉並区は23区で特徴ある区。
反原発運動、特徴を2区長（山田宏氏？）、ようさん（生糸）関係、etc.あさがやしまい、純情通り。
昔は東京市に入っていなかったのでは？
ちょっと杉並区の歴史に関す本を読んでみたくなった。

●見てよかった、と思える映画でした。
ありがとうございました。
次回も期待しています。
非正規公務員が増え、雇用維持のため市民の声より上司（正規公務員）の声を重視している。
選挙の活動も大事と思うが、日頃から思いやり、基本人権の尊重を大切にしたいと思う。
参議院選挙、も杉並区の選挙区を注目。
いろんな意見があるので映画で描かれているように大変だと思う。けれどこれも民主主義。(S.K.)

●ようやく鑑賞できました。感謝です。
杉並の女性達に励まされました。明るく元気で、軽やかな皆さん、あっぱれです。小さな力が集まって、杉並区を動かした事、感銘しました。私も小さな住民運動に参加しています。自治体を変えていく事のむずかしさを感じています。市民派、区民派を名乗って当選した議員が、市（区）役所や自民党にドウカツされて、なびいてしまいます。市民、区民のための自治体をどうやって築くのか、努力していきます。
明日（1/13）成人式会場で、ひとり街宣やります。
「センキョは続くよどこまでも」、使わせてもらいます。

●見たい映画、作品『カメジロー』（佐古忠彦監督）
那覇市長、衆院議員を務めた瀬長亀次郎を描いた作品です。
ＴＢＳのプロデューサー、ディレクターだった吉永春子さん（故人）の作品。どれでも構いません。未復員兵士、７３１部隊、ハンセン病などなど。(Y.O.)

●見たい映画
沖縄狂想曲、主戦場 (H.Y.)

資料❺　憲法映画祭2025のご案内

憲法映画祭2025

日時：2025年4月29日（休・火）
会場：武蔵野公会堂ホール
（中央線・井の頭線 吉祥寺駅 南口2分）

プログラム：
10：00　開場
10：20　開会
10：30　映画「禁じられた遊び」（87分）
12：00　食事休憩
13：00　映画「ベアテの贈りもの」（92分）
15：00　映画「オン・ザ・ロード― 不屈の男 金大中」（129分）
17：20　映画「夢みる校長先生」（82分）

参加費：１日券：一般：2500円　若者：1500円
１回券：一般：1000円　若者：　500円

（予約不要でどなたでも参加できます。「夢みる校長先生」は高校生以下無料です。）

映画「禁じられた遊び」

戦争によって苦しむのは、権力者ではなく、いつも罪のない市民、とくに女性、子どもです。今も、世界中でそうした戦争が繰り返されています。
子どもの頃見たこの映画をもう一度見て、について考えていきましょう。
第二次世界大戦中のフランス。ドイツ軍によるパリ侵攻からの避難の途中、
5歳の少女ポーレットは、爆撃により両親と愛犬を亡くしてしまいます。
ひとりはぐれて、子犬の亡きがらを抱きながらさまようううち、11歳の農家の少年ミシェルと出会います。ミシェルから「生きものは死んだら土に埋めるのだ」と知らされたポーレットは子犬を埋め、お墓をつくり十字架を供えます…。
（87分／1952年／ルネ・クレマン 監督作品）

13:00～ 映画「ベアテの贈りもの」

憲法の重要な柱のひとつ基本的人権、そしてすべての「人」は平等であること。この憲法の基本について考えて行くものとして、この作品を選びました。
憲法の成立過程やそこに関わった人々の思いを知る上でも優れた作品です。
ベアテ・シロタ・ゴードンは、男女平等を定めた日本国憲法第24条の生みの親です。昭和初期の日本で、彼女は日本女性たちの抑圧された状況を目のあたりにして育ちました。そのことが、弱冠22歳で日本国憲法草案委員として、歴史的に重要な基本的人権の条文を起草する上で活かされています。
（92分／2004年／藤原智子 監督作品）

15:00～ 映画『オン・ザ・ロード 不屈の男 金大中』

憲法の理念を実現させるためには、確かな民主主義がなければなりません。
この映画は、民主主義と平和の実現に、全てをかけた政治家、金大中の半生を描いたものですが、同時に韓国の民主化の歩みを描いています。
昨年も「戒厳令」という言葉があった途端に多くの市民が街頭で出て立ち上がりました。そうした市民の政治意識をつくった韓国の近代史に学びたいと思いました。それはまた、憲法改定の眼目とされている「緊急事態条項」のまやかしに、私たちがどう反対していくかを考えるものでもあります。
（129分／2024年／ミン・ファンギ 監督作品）

17:20～ 映画「夢みる校長先生」

憲法を、どう生活や社会の中でどういかしていくか、それを考えた時、やはり「教育」に行きつきます。教育、それも子どもたち自身が、身をもって感じ
体得する「自由」や民主主義、それが子どもたちの未来をつくっていくということがこの映画から感じ取れます。
この映画で、子どもたちが主体となった教育に取り組んでいるのは、公立学校の校長先生です。その取り組みの姿を見て、やれば出来るんだ、変えていくことが出来る、そうした励みになる明るい気持ちになります。この明日につながる映画を映画祭のラストプログラムにしたいと思いました。
（82分／2023年／オオタヴィン 監督作品）

憲法映画祭 2025

2026年以来、憲法記念の日を前にしたお休みの日に少し会場を大きくして行われてきた「憲法映画祭」も9回目になります。

日時：2025年4月29日（火・休）10時～19時
会場：武蔵野公会堂（東京都武蔵野市吉祥寺南町1-6-22）
中央線・井の頭線下車南口2分

＊プログラム、上映作品の解説は11ページをご覧ください。

第82回 憲法を考える映画の会

と　き：**2025年6月（予定）**
ところ：**文京区民センター**
（地下鉄春日駅2分・後楽園駅5分）予定

第12回 むのたけじ反戦塾

と　き：**2024年5月24日（土）**
13時30分～17時（13時開場）
ところ：**文京区民センター ３C会議室**

この反戦塾の議論はひとまず10回目を、これまで考えてきたことを出し合う区切りとすることにしました。
その成果を出来るだけ具体的にまとめていって、私たちがこの間、考えて話し合ってきた「戦争はいらぬ、戦争をさせぬ世へ」を実現するためにはどうすれば良いか、社会に発信していけるように12回目の反戦塾を作っていきたいと考えています。
さらに8月には、昭和100年、戦後80年をも意識して、少し大きめの「反戦」の学習会をしていけるように計画しています。

＊問合せ先：090−4599−5314 武野
〒338−0006　さいたま市中央区八王子4-7-10-201
E-mail:dmuno@jcom.home.ne.jp

憲法を考える映画の会のご紹介

■憲法を考える映画の会（定例会）

■憲法を考える映画のリスト

■ホームページ「憲法を考える映画」

■Facebook　憲法を考える映画の会

■シネマde憲法

上映会・催しの案内

3月22日（土）14時半～　シンポジウム「これからの放送をどうするか～NHK文書開示等請求訴訟の成果と課題」砂川浩慶、杉浦ひとみ、長井暁、永田浩三（立教大学池袋キャンパス10号館＝池袋駅）

3月29日（土）10時～　虫プロ名画祭2025
『ある街角の物語』『展覧会の絵』など（百観音明治寺沙羅会館＝西武池袋線 沼袋駅）

3月30日(日)13時～　「春！だきしめる平和のシンポ～戦争を知ろう～」神田香織゛講談はだしのゲン゛、伊勢崎賢治講演･炎のJazz゛戦争の現場から゛/（みなとパーク芝浦1階リーブラホール＝JR田町駅東口5分）

4月5日(土)14時～　「石川一雄さんに再審無罪を！市民の集い～差別が冤罪を生んだ」菊地事件弁護士徳田靖之さん/市民プラザかぞ(JR加須駅10分)

4月12日（土）10時～　第77回埼玉・市民ジャーナリズム講座「永遠の戦後のために～戦後80年ジャーナリズムの役割とは～」講師：栗原俊雄＝毎日新聞専門記者（さいたま市武蔵浦和コミセン＝武蔵浦和駅）

4月16日(水) 10時半～　「九条の会･ちがさき後援名義不承認事件第3回口頭弁論」（横浜地裁502＝JR関内駅5分）

4月18日(金) 11時～「石垣敏夫さんへの法廷内衛視暴力事件第5回口頭弁論」（さいたま地裁101＝浦和駅西口7分）

4月29日（火・休）10時～　憲法映画祭2025（第81回憲法を考える映画の会）
『禁じられた遊び』『大東亜戦争』『オン・ザ・ロード～不屈の男 金大中』『夢みる校長先生』を予定（変更することがあります）（武蔵野公会堂ホール＝吉祥寺駅）

5月24日（土）13時半～　第12回むのたけじ反戦塾（文京区民センター＝地下鉄春日駅）

憲法を考える映画の会

〒185-0024
東京都国分寺市泉町3-5-6-303
TEL & FAX：042-406-0502
ホームページ：http://kenpou-eiga.com/
E-mail：hanasaki33@me.com